

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との関係について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 備前, 嘉文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001358">https://doi.org/10.57529/00001358</a>

# 親のスポーツ観と子どものスポーツ活動 に対する期待との関係について

備前 嘉文

## 【要旨】

1990年代後半から国の施策として全国各地に総合型地域スポーツクラブが設立され、多くの子どもたちがスポーツ活動に参加している。子どものスポーツ活動をはじめとする塾や習い事については、本人の年齢がまだ幼いことから入会や退会の権限、または活動の継続に対しては保護者の影響が強いとされる。本研究では、総合型地域スポーツクラブの事業の一つである子どものスクール活動に焦点をあて、子どもをスクールに通わせる保護者のスポーツに対する考え方と子どものスポーツ活動に対する期待の関係を明らかにすることを目的とする。総合型地域スポーツクラブが実施するスクールに子どもを通わせる保護者を対象にアンケート調査を実施した結果、自身がスポーツに対して競技的要素を重視する保護者は子どものスポーツ活動に対しても競争心を養うことや将来の活躍を期待するなど、親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との間には密接な関係があることが明らかとなった。

## 【キーワード】

スポーツ観、子どものスポーツ活動、総合型地域スポーツクラブ、親の期待、クラブ経営

はじめに

## 【緒言】

日本の体育・スポーツはこれまで学校と企業によって支えられ、発展してきた。しかしながら、社会状況の変化により、1990年代後半から国の施策としてスポーツ振興の中心は地域へと移行する動きがみられ、全国各地に総合型地域スポーツクラブが設立されている。総合型地域スポーツクラブとは、人々が身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、(1) 子どもから高齢者まで（多世代）、(2) 様々なスポーツを愛好する人々が（多種目）、(3) 初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）という特徴を持ち、地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブである（文部科学省,2001）。2016年現在、設立準備中のクラブも含め、全国で3,550のクラブが活動を行っている（スポーツ庁,2016）。特に近年では、体罰問題や教員の負担増などの観点から学校の部活動のあり方

が全国的に問われる中で、総合型地域スポーツクラブに対する期待は高まっている。

総合型地域スポーツクラブの主な収入源は、クラブ会員からの「会費」を柱とし、他にはイベントなどの開催による「事業収入」、「寄付金収入」、「受託事業収入」、「協賛金」、そして国や地方自治体からの「助成金」から成り立っている（文部科学省,2001）。各クラブは安定的な経営を行うにあたり、クラブの規模や地域の実情に合わせたプログラムの提供が求められている。しかしながら、全国で総合型地域スポーツクラブの数は年々増加しているものの、必ずしもすべてのクラブの経営が順調であるとは言えず、多くのクラブで会員の獲得および財源の確保や、指導者の育成などにおいて課題があると報告されている（スポーツ庁,2017）。

スポーツ庁（2016）が全国の総合型地域スポーツクラブを対象に行った調査によると、総合型地域スポーツクラブに通いスポーツ活動をおこなう会員の内訳は、未就学児4.4%、小学生19.9%、中学生5.9%、高校生2.7%と報告されており、全国平均で会員の約3割が児童・生徒ということが明らかとなっている。そして、子どもの習い事にかかる費用については1ヵ月あたり平均で1万3,000円、また実際に行っている習い事の数には平均1.95個と報告されている（日本経済新聞,2015）。子どものスポーツ活動をはじめとする塾や習い事については、本人の年齢がまだ幼いことから入会や退会の権限、または活動の継続に対しては保護者の影響が強いとされる（谷口ら, 2007；池田,2009；金子ら,2008；加藤・杉若,2009；久崎・石山,2012）。子育て、特に子どもの塾や習い事など教育費に対する支出は年々上昇しており、それらの支出が家計を圧迫することが今日の少子化の要因の一つとしても挙げられている（森田,2004；日本経済新聞,2015）。その一方で、子どものスポーツ活動については、将来自身の子どもがトップアスリートになることを期待して、幼い時期から専門的な指導を受けさせたいと考える保護者も増加しており、ゴルフやテニスなどをはじめ様々な種目において子どもを対象としたより専門的なプログラムを提供する事業も多く見られる。つまり、子どものスポーツ活動への参加に関しては、保護者の様々なニーズが影響しているのである。総合型地域スポーツクラブが今後安定的なクラブ経営を行うにあたっては、入会や退会などの意思決定に大きく関わる保護者のニーズを把握することが大変重要であると思われる。そこで、本研究では、総合型地域スポーツクラブの事業の一つである子どものスクール活動に焦点をあて、子どもをスクールに通わせる保護者のスポーツに対する考え方と子どものスポーツ活動に対する期待の関係を明らかにすることを目的とする。

## 【先行研究】

### 1.スポーツ観が形成される歴史的な背景

人々がスポーツに対して抱く意味や価値の観念を「スポーツ観」と呼び、スポーツ観はスポーツ文化の正当性や相対的な文化的価値序列を形成する中核的な観念とされる（青木,2003）。本稿の冒頭でも述べたように、わが国の体育・スポーツは学校と企業によって支えられて発展してきた。とりわけ学校が体育・スポーツの発展に寄与した背景については、明治政府が国策として富

国強兵を推し進め、その担い手として学校教育とりわけ体育に力を注いだからとされる（今村,1970）。合わせて、その時代（明治期）には、海外から多くの文化・芸術も輸入され、スポーツもまた外国人教師や軍人たちによって日本の学校に導入されたのである。このように、体育とスポーツはともに第二次世界大戦前・戦中は軍事教練、そして戦後は教育の一環として多くの者に認識され発展してきた。今日において、日本のようにスポーツが学校教育活動の一環として成立し、スポーツと教育の密接な関係が維持されている国は世界的に見ても珍しいとされる（中澤,2011）。しかしながら、スポーツ（Sport）は本来、「気晴らし」や「楽しみ」、「遊ぶ」などを意味する中期英語「disport」が変化した言葉、またはフランス語の「desporter（気晴らしをする）」に由来するとされ、日常生活における自由な時間に自分の意志で行う活動であることから、体育とは異なる概念である。つまり、それは同時に日本では体育とスポーツの明確な区分や理解がなされないまま、「体育＝スポーツ」として世の中に浸透し、今日に至っていることを意味する。

また、スポーツについては、プロスポーツやトップアスリートに代表されるように、技術や記録の向上、勝利を目指し人間の極限への挑戦を追及することを目的とする競技スポーツと、身近な生活の場において楽しみを求め、心身の健康増進や社交を目的とする生涯スポーツに分類できる（岸野,1987）。このことから、日本人のスポーツ観は多様であり、実際の青少年期のスポーツ指導の現場においても、指導をおこなうにあたり技術や競技力、試合での結果を重視する指導者がある一方で、日常生活における生活態度や学業成績といった教育的な側面をより重要であると考える指導者も存在する（中澤,2011; 蔵元,2013）。近年、体罰問題や勝利至上主義に対する批判など、学校の部活動のあり方に対しての議論が活発におこなわれているが、これらの問題についても多くの部分において個々人のスポーツ観の相違に起因するとの指摘がある（中澤,2011; 谷口,2014）。

## 2.保護者のスポーツに対する考え方

スポーツを提供する側である学校や企業、そして地域のスポーツクラブの指導者において多様なスポーツ観が見られる一方で、スポーツを享受する側である保護者および子どもにおいても当然のことながらスポーツをおこなう意義や目的は異なっている。すなわち保護者や子供たちそれぞれが持つスポーツ観も多様なものとなっている（Robinson and Carron,1982; 筒井ら,1996）。例えば、筒井ら（1996）では、スポーツにおける勝敗に対する態度の視点から検討をおこない、「スポーツは勝ってこそ喜びが生まれるものである」や「スポーツの魅力は勝負があるからである」など勝利を重視した考えを「勝利志向性」、そして「スポーツはただ純粋に楽しむものである」や「汗を流してストレス解消になればよい」といった楽しむことに主眼が置いた考えを「レクリエーション志向性」としている。勝利志向性が高い競技スポーツ的なスポーツ観を持った保護者ほど、将来自身の子どもがトップアスリートになることを期待しているのだろうか。

### 3.子どものスポーツ活動に対する期待

子どものスポーツ活動に対する親の期待について金子ら（2008）は、Jリーグクラブが主催する子ども向けのサッカースクールに通わせる保護者を対象に調査をおこない、その結果から「技術的側面への期待感」、「道徳的側面への期待感」、「対人関係的側面への期待感」の視点から検討をおこなっている。また、谷口ら（2007）では、「何事にも挑戦する気持ちを持てるようになること」に代表される「生活態度」や、「ライバル関係ができること」や「年代の違う人と交流できること」などによる「スポーツ価値意識」、そして「注目を浴びられるかもしれない」や「将来スポーツの指導者になれるかもしれない」など「将来志向」を保護者が抱く子どものスポーツに対する期待として挙げている。子どもの活動に対する親の期待については、先に挙げたスポーツ観の他に、保護者自身の経験も大きく影響すると言われる。その一例として、勉強（学力）面においては、学歴の高い親ほど、自身の子どものにも高い学歴を期待することが報告されている（荒牧,2002; 森田,2004）。このことから、子どものスポーツ活動に関しても、学生時代の競技成績が高い親ほど子どもにも高い期待をすることが予想される。

## 【方法】

### 1.調査概要

2015年11月から12月の期間に、総合型地域スポーツクラブが実施するスクールに子どもを通わせる保護者を対象にアンケート調査を実施した。対象としたスポーツクラブは、サッカーを中心に、陸上競技、バスケットボール、ダンス、バトン、ヨガ教室などの種目を実施し、会員数も大人から子どもまで500名を超えている。具体的な調査実施方法としては、スクール活動終了後に各種目の担当コーチより保護者に対して調査の説明およびアンケート用紙の配布を行い、帰宅後に自宅で保護者が回答し、次の活動日に提出する形式で行われた。

### 2.調査項目の設定および回答方法

本研究で実施したアンケート調査に用いる調査票の作成にあたっては、先行研究をもとに検討をおこない、クラブの関係者と協議のうえ、最終的な決定を行った。保護者のスポーツに対する考え方については、筒井（1996）をもとに「スポーツは勝ってこそ喜びが生まれるものである」や「スポーツは汗を流してストレス解消になればよい」など、勝利志向性5項目とレクリエーション志向性5項目の合計10項目に対して、「1. まったく思わない」から「5. 大変そう思う」の5段階で回答を求めた。また、保護者の子どものスポーツ活動に対する期待については、金子ら（2009）を参考に、「技術を習得させたいから」や「遊びとしてスポーツを楽しんでほしいから」、「プロ選手になってほしいから」、「小学校での体育の授業に備えて」など合計13項目の質問を行い、それぞれの質問項目に対して、「1. まったく期待しない」から「5. 大変期待する」の5段階で回答を求めた。その他にも、調査票には、子どもの参加種目、学年、親の年齢、性別、現在のスポーツ

クラブへの加入の有無、現在のスポーツ活動状況などについての質問を行った。

## 【結果】

### 1.回答者の内訳

調査は開始から約3週間で締め切られ、期間中に327部の質問票を配布し、最終的に子どもをスポーツクラブに通わせる保護者219名から回答が集まった（回答率67.0%）。全体の有効回答者の内訳は、男性30名・女性183名（性別未回答6名）、平均年齢40.23歳である。表1には、今回の調査に参加した保護者についてのより具体的な内訳を示している。まず、子どもが参加する種目については、サッカーが186名と最も多く、続いて陸上17名、ダンスとバトンがそれぞれ8名ずつ、そして子どもの学年については、小学4～6年が86名、小学1～3年が74名、中学生が52名の順となっており、クラブの会員構成を反映した結果となっている。続いて、親の学生時代のスポーツの競技成績について質問したところ、競技成績なし（レクリエーションとして活動）が116名、都道府県大会出場レベルが59名、全国大会に出場した経験を持つ者が13名となり、多くの保護者が学生時代に何らかのスポーツ活動に参加していたことがわかる。しかしながら、親の現在のスポーツ活動については、「まったく活動していない」が149名と最も多く、スポーツクラブへの加入についても「加入している」はわずか25名であった。

表1 回答者の内訳

子どもの参加スポーツ n = 219	サッカー 186	陸上 17	ダンス 8	バスケットボール 0	バトン 8
子どもの学年 n = 219	幼稚園 6	小学1～3年 74	小学4～6年 86	中学生 52	未回答 1
親のスポーツ活動 n = 219	まったく活動していない 149	週に1回程度 40	週に2～3回 16	週に4回以上 4	未回答 10
親のスポーツクラブへの加入 n=219	加入していない 187		加入している 25		未回答 7

表2 親のスポーツに対する考え方

項目	度数	平均値	標準偏差
スポーツは勝ってこそ喜びが生まれるものである	219	3.43	0.92
スポーツは汗を流してストレス解消になればよい	219	3.31	0.88
スポーツは余暇を楽しむためにやるものである	218	2.93	0.82
スポーツは勝つことに意義がある	217	3.04	0.99
スポーツの魅力は勝ち負けがあるからである	217	3.27	1.02
スポーツはただ純粋に楽しむものである	219	3.19	0.79
スポーツでくやしい思いをしたくないので、勝つために努力すべきだ	219	3.44	1.00
スポーツは気のあった者同士で仲良くできればよい	218	2.47	0.96
スポーツで勝った時の感激は何ものにもかえがたい	218	4.25	0.79
スポーツは勝ち負けはさほど重要ではない	219	2.85	0.95

## 2.親のスポーツに対する考え方と子どものスポーツ活動に対する期待

### 2-1 親のスポーツに対する考え方について

親のスポーツに対する考え方を調べるにあたり、勝利志向性5項目とレクリエーション志向性5項目の合計10項に対して、「1. まったく思わない」から「5. 大変そう思う」の5段階で回答を求めた。それぞれの項目に対して回答者の平均値を算出したところ、全体では「スポーツで勝った時の感激は何ものにもかえがたい」、「スポーツでくやしい思いをしたくないので、勝つために努力すべきだ」、「スポーツは勝ってからこそ喜びが生まれるものである」の順に高い値を示した（表2）。

その後、回答者ごとに勝利志向性5項目とレクリエーション志向性5項目の合計を算出し、勝利志向性の合計が高い回答者を勝利志向グループ、レクリエーション志向性の合計が高い回答者をレクリエーション志向グループ、両方の合計が同じ回答者を中立グループと3つのグループに分類したところ、勝利志向グループには155人、レクリエーション志向グループには33人、中立グループには25人に分かれた。表3は、スポーツに対する考え方をもとに分類した3つのグループと親の学生時代の競技成績のクロス集計およびカイ2乗検定（独立性の検定）の結果である。この結果から、親のスポーツ競技成績とスポーツ観の間には有意な関係性が見られなかった。

表3 親のスポーツに対する考え方と学生時代の競技成績

		競技成績			合計	
		競技成績なし (レクリエーション として活動)	都道府県大会 出場レベル	全国大会出場 出場レベル		
競技志向	度数	82	42	10	134	
	(志向別の%)	61.2%	31.3%	7.5%	100.0%	
	(競技成績の%)	73.2%	72.4%	76.9%	73.2%	
	(総和の%)	44.8%	23.0%	5.5%	73.2%	
	調整済み残差	0.0	-0.2	0.3		
スポーツに 対する考え (志向別)	レクリ エーション 志向	度数	20	11	1	32
	(志向別の%)	62.5%	34.4%	3.1%	100.0%	
	(競技成績の%)	17.9%	19.0%	7.7%	17.5%	
	(総和の%)	10.9%	6.0%	0.5%	17.5%	
	調整済み残差	0.2	0.4	-1.0		
中立	度数	10	5	2	17	
	(志向別の%)	58.8%	29.4%	11.8%	100.0%	
	(競技成績の%)	8.9%	8.6%	15.4%	9.3%	
	(総和の%)	5.5%	2.7%	1.1%	9.3%	
	調整済み残差	-0.2	-0.2	0.8		
合計	度数	112	58	13	183	
	(志向別の%)	61.2%	31.7%	7.1%	100.0%	
	(競技成績の%)	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(総和の%)	61.2%	31.7%	7.1%	100.0%	

## 2-2 親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との関係

次に、子どものスポーツ活動に対する期待について、「1. まったく期待しない」から「5. 大変期待する」の5段階で回答を求め、それぞれの項目の平均値を求めたところ、どの項目も全体的に高い値であったがその中でも「ルールや時間を守る習慣を身につけてほしい」、「協調性を身につけてほしい」、「体力や運動能力をつけてほしい」の順に高い値となった。最後に、親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との関係を調べるにあたり、子どものスポーツ活動に対する期待について先の親のスポーツに対する考え方の回答をもとに分類した勝利志向グループ、レクリエーション志向グループ、中立グループの3グループ間で一元配置分散分析(ANOVA)を行った。その結果、表4に示すように、「遊びとしてスポーツを楽しんでほしい」(F(2,210) = 3.167, p<.05)、「一流のスポーツ選手になってほしい」(F(2,210) = 7.468, p<.01)、「競争心をつけてほしい」(F(2,210) = 4.389, p<.05)の3項目でグループ間に有意な差が見られた。その後、有意な差が見られた3項目について、多重比較(Bonferroni法)を行った結果、すべての項目において勝利志向グループとレクリエーション志向グループ間で有意な差が見られた。



表4 親のスポーツに対する考え方と子どものスポーツ活動に対する期待

	競技志向 (n=155)	レクリエーション志向 (n=33)	中立 (n=25)	F値	多重比較
遊びとしてスポーツを楽しんでほしい	3.75 (0.97)	4.21 (0.82)	3.84 (1.10)	3.167*	競技・レクリエーション間
一流のスポーツ選手になってほしい	3.01 (1.12)	2.30 (1.05)	2.44 (1.04)	7.468**	競技・レクリエーション間
競争心をみにつけてほしい	4.18 (0.90)	3.67 (1.08)	4.00 (0.76)	4.389*	競技・レクリエーション間

\* &lt;.05 \*\* &lt;.01

**【考察】**

先行研究では学歴などの勉強面において、自身の活動実績が高い親ほど子どもに対しても高い期待をすることが述べられている（荒牧,2002; 森田,2004）。このことから、子どものスポーツ活動に関しても学生時代の競技成績が高い親ほど子どもにも高い期待をすることが予想された。しかしながら、本研究の調査に参加した保護者の多くは学生時代に何らかのスポーツ活動に参加していたが、それらの活動の成績と現在のスポーツ観には有意な関係性が見られないという結果が得られた。このような結果が見られた理由のひとつとして、スポーツの場面では苦しい練習や上下関係など自身の辛い経験から子どもには自身と同じような経験を望まない保護者がいることが考えられる。その一方で、「代理人による達成」(achievement by proxy)として、保護者自身が幼少期または学生時代に果たせなかった夢を子どもに叶えて欲しいと考える者もいることから、本研究の結果のように必ずしも保護者のスポーツ経験と子どもへの期待は繋がらないのではないと思われる（武田,2008; 久崎・石山,2012）。

本研究では、親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との関係についても検証を行い、子どものスポーツ活動に対する期待についてグループ間での比較を行ったところ、グループ間で有意な差が見られた項目のうち、「遊びとしてスポーツを楽しんでほしい」はレクリエーション志向グループ、そして「一流のスポーツ選手になってほしい」と「競争心をつけてほしい」は勝利志向グループの方が高い値を示した。この結果から、自身がスポーツに対してレクリエーション的要素を重視する保護者は、子どものスポーツ活動に対しても楽しむことを期待し、一方で、自身がスポーツに対して競技的要素を重視する保護者は、子どものスポーツ活動に対しても競争心を養うことや将来の活躍を期待すると言える。すなわち、親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との間には密接な関係があることが本研究の結果から明らかとなった。

**【結論】**

近年、子どものスポーツ活動に関しては、様々なプログラムが提供されている。本研究では実際に子どもを地域スポーツクラブが提供するスポーツ活動に参加させている保護者を対象に実施

したアンケート調査の結果から、親のスポーツ経験やスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待の関係について検討を行った。その結果、自身がスポーツに対して競技的要素を重視する保護者は子どものスポーツ活動に対しても競争心を養うことや将来の活躍を期待するなど、親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との間には密接な関係があることを示すことができた。多くのクラブが会員の獲得に苦勞する中で今後も安定的な経営を行うにあたり、クラブの規模や子ども会員またはその保護者の実情に合わせたプログラムの提供が求められている。その中で、入会時または定期的に保護者への調査やヒアリングを実施し、親のニーズを把握することで会員の満足度を高めるとともに、退会などのリスクを減らすことが可能になるとと思われる（谷口ら, 2007; 池田, 2009; 金子ら, 2008; 加藤・杉若, 2009; 久崎・石山, 2012）。また今回の調査では、子どもをスポーツクラブに通わせる保護者の大半が保護者自身の現在のスポーツ活動について「まったく活動していない」と回答した。多くの習い事の中で、スポーツは親と子どもの接触の機会を増やし、親子関係の強化に貢献すると言われる（佐々木, 2009）。このことから、今後、総合型地域スポーツクラブをはじめとするスポーツをサービスとして提供する団体は、クラブの理念や活動内容についてしっかりと説明した上で、保護者に対しても活動への参加を積極的に呼び掛けることが会員の獲得ならびに収入の増加が期待できると言えるだろう。

#### 【文献】

- ・青木邦男（2003）高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因. 体育学研究, 48 : 207 - 223.
- ・荒牧草平（2002）現代高校生の学習意欲と進路希望の形成— 出身階層と価値志向の効果に注目して— . 教育社会学研究, 71 : 5-23.
- ・久崎孝浩・石山貴章（2012）スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響：その研究動向と今後の方向性. 応用障害心理学研究, 11 : 45- 67.
- ・池田幸恭（2009）大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係. 青年心理学研究, 21 : 1-16.
- ・今村嘉雄（1970）日本体育史, 不昧堂出版
- ・金子勝司・東野充成・村田敦郎（2008）子どもとスポーツの発達に関する研究：子ども向け地域スポーツに対する親の期待感と効用感. 共栄学園短期大学研究紀要, 24 : 91-108.
- ・加藤弘・杉若裕介（2009）総合型地域スポーツクラブに関する研究：保護者からみた期待度と満足度. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19 : 105-109.
- ・岸野雄三・黒田善雄・鈴木祐一. (1987) . 最新スポーツ大事典.
- ・蔵元彩・鈴木淳（2013）バスケットボールにおける一貫指導システムの現状と課題—サッカーの一貫指導システムとの検討—. 福岡教育大学紀要, 第62号（5）：111 - 118.
- ・文部科学省（2001）総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル. Retrieved September 1, 2016, from [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/club/main3\\_a7.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm).

- ・ 森田陽子（2004）子育て費用と出生行動に関する分析. 日本経済研究, 48 : 34-57.
- ・ 中澤篤史（2011）なぜ教師は運動部活動へ積極的にかかわり続けるのか：指導上の困難に対する意味づけ方に関する社会学的研究. 体育学研究, 56（2） : 373-390.
- ・ 日本経済新聞（2015）習い事費用、月1万3000円強. 11月2日.
- ・ Robinson, Timothy T., and Albert V. Carron. (1982) "Personal and situational factors associated with dropping out versus maintaining participation in competitive sport." *Journal of Sport Psychology*, 4,4 : 364-378.
- ・ スポーツ庁（2016）平成27年度 総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果.
- ・ スポーツ庁（2017）平成28年度 総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果.
- ・ 佐々木卓代（2009）子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感：スイミングスクールを対象とした調査から. 家族社会学研究, 21（1） : 65-77.
- ・ 武田大輔（2008）指導と心理臨床の現場から子どものスポーツの可能性を問う. 児童心理, 62（14） : 1387-1391.
- ・ 谷口勇一・ 渕辰雄・ 永井太介・ 羽田野直樹・ 村江史年・ 村上智美（2007）子どものスポーツに対する期待構造：小学生とその保護者への意識調査から. 大分大学生涯学習教育研究センター紀要, 7 : 23-36.
- ・ 谷口勇一（2014）部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討：「失敗事例」からみえてきた教員文化の諸相をもとに. 体育学研究, 59 : 559-576.
- ・ 筒井清次郎・ 杉原隆・ 加賀秀夫・ 石井源信・ 深見和男・ 杉山哲司（1996）「スポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因：Self-efficacy Modelを中心に」. 体育学研究, 40 : 359-370.

（びぜんよしふみ 國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授）